

令和6年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立 ひびきの 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、6年生を対象として、令和6年4月18日（木）に、「教科（国語、算数）に関する調査」、文部科学省が指定した日（4月10日から4月30日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査（国語、算数）

教科に関する調査（国語、算数）
① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等 ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

(2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○ 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査（国語、算数）の結果

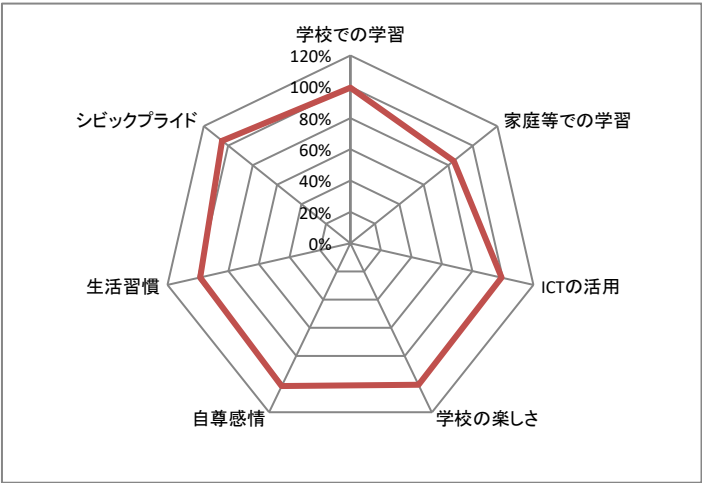
本年度の結果	国語		算数	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	9.3	66	9.6	60
全国	9.5	68	10.1	63

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	平均正答率は多くの問題で県平均と同等であり、全国平均を上回った。前年度の課題であった「書くこと」の領域においては、目的や意図に応じて、伝えたいことを明確にする内容の正答率は高かった。しかし自分の考えを広げ、自分の考えが伝わるように書き方を工夫する項目などの記述式の問題には課題が見られた。	全国平均正答率との比較
	よくできた問題	・学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかを問う問題。 ・資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫することができるかどうかを問う問題。	上回っている
	努力が必要な問題	・日常的に読書に親しみ、読書が自分の考えを広げることに役立つことに気付くことができるかを問う問題。	

算数	全体的な傾向や特徴など	前年度からの課題であった「図形」と「データ分析」に関しては、引き続き県平均を上回ることができなかった。数量の関係を理解し、式に表す力を試す、知識・技能に関する問題は県平均を上回っている。公式や解法を暗記することはできているが、情報量が少ない問題文から多面的に捉えてどの公式をどの場面で活用するかを読み取る必要のある「記述式」の問題に課題が見られた。	全国平均正答率との比較
	よくできた問題	・道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述することができるかどうかを問う問題。【変化と関係】	下回っている
	努力が必要な問題	・示された情報を基に、表から必要な数値を読み取って式に表し、基準値を超えるかどうかを判断する問題。【数と計算】【データの活用】	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要



質問調査の結果分析
・「友達関係に満足しているか」「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」との問いに対して約90%の児童生徒が肯定的に回答している。「学校の楽しさ」、「自尊感情」に関する項目は前年度と同様に全国平均を上回った。また、前年度全国平均を下回っていた「シビックプライド」に関する項目は全国平均を上回った。今後も「こどもまんなかプロジェクト」と「子どものためのウェルビーイングを高める教育」を推進していく。
・「ICTの活用」と「家庭等での学習」に関する項目では肯定的な回答した割合が著しく低かった。学校外でも学ぶことができる学習アプリだけに留まらず、これまで以上にICTを最大限活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させる授業を進めていく。そして家庭でも児童自ら学習ができる個に応じた学習支援を継続していく必要がある。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組

国語科においては、事実と感想・意見とを区別できているか、目的に応じての使い分けができているかを確認しながら、簡単に書いたり詳しく書いたりなど、自分の考えが伝わるよう文章にまとめる指導をしていく。必要に応じて、よい例を学級内で共有しながら、協働的な学びに繋げていく。
算数科においては、問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考える児童が少ないことが分かった。前年度に引き続き単元末の「たしかめよう」の学習の際に、学習頻度の少ない応用的な内容で力を試す機会を設ける。日常生活と結び付けながら、論理的思考力を養い、量や距離感、空間認識能力の感覚が身に付く指導をしていく。

② 家庭生活習慣等に関する取組

家庭学習においては、休日の家庭学習は比較的十分行っている児童は見られたが、平日の家庭学習がやや少ない傾向にある。日々の宿題や家庭でもできる自主学習の方法を学校で促し、指導を行っていく。また、学力向上の取り組みとして、中学校と連携を図り、6年生を対象とした出前授業（中学校の先生が授業を行う）を行い、教科の内容だけでなく、中学生の家庭での平均学習時間や勉強方法を児童に周知する。中1ギャップに陥ることのないよう、家庭学習の重要性を通信等で保護者へ啓発していく。
